

---

# 新生「タクフィール・ワ・ヒジュラ」の思想と行動

## Doctrines and Activities of the New *al = Takfir wa al = Hijra*

中田 考\*

NAKATA Ko

---

キーワード：タクフィール，ヒジュラ，イスラーム主義者，武装闘争，指導権

KEY WORDS: Takfir, Hijra, Islamist, armed struggle, leadership

We have heard little about *al = Takfir wa al = Hijra* after the execution of its founder *Shukri Mustafā* in 1977.

This article discloses their current activities and thoughts and analyzes their characteristics.

In chapter 1, we describe the history and thoughts of *al = Takfir wa al = Hijra* before the execution of its founder *Shukri Mustafā*.

In chapter 2, we clarify the process of their re-forming the organization, deposing of the first successor *Abū al = Ghaiṭh*, and finally selecting Dr. *Wahid* as the leader, caliph of all muslims over the world.

In chapter 3, by comparing thoughts of *al = Takfir wa al = Hijra* and ones of *Jihād* and *al = Jamā'a al = Islamiya*, we show that *al = Takfir wa al = Hijra* is completely different from *Salafi* Islamists as well as the whole Sunni school.

And in chapter 4, we analyze the significances of arresting 245 members of *al = Takfir wa al = Hijra* in Egypt on April and its participation in Caliph Conference organized by the Islamic Liberation Party in London, August 1996.

In the opinion of *al = Takfir wa al = Hijra*, only those who swear *bai'a* to Imam of them are the true muslims and all the others are unbelievers. But they neither advocate *jihad* against the anti-Islamic regime nor make concrete program to establish the Islamic state. That is because they believe even though they are still now deemed weak, they will win a final victory after evil global powers fight each others to fall together by themselves.

---

\* 山口大学教育学部助教授 Associate Professor, University of Yamaguchi

## 序

オウム真理教事件は、国家が暴力装置であることを改めて見せつけるものであった。

小火器類に加え毒ガス・サリンなどの化学兵器で武装し、数百億円とも言われる資金源を有し、化学薬品や瞑想の技法などを用いて指導者の命令に絶対服従するようにマインドコントロールされた文字どおり「狂信的」な信徒団を抱え、テレビなどマスコミをも利用し大々的な広報戦略を展開したオウム教団も、国家権力という暴力機構の本格的な介入の前には為す術もなくひたたりもなく壊滅させられた。

国家は本質的に暴力機構である。そして暴力の独占こそ「近代国民国家」の本質をなす。旧共産圏及び第三世界の多くの国々の間では、国家の支配は剥き出しの暴力性の誇示によって支えられており\*1、イスラム世界の諸国家もそうである。サウディ

アラビア、モロッコなどの王制諸国の伝統に依拠する「専制」体制も、イラクやリビアのような共和制国家の「人民の名」によって支配する全体主義的「独裁」体制も、また政治体制のイスラーム化が謳われているイランやスーダンの「イスラーム国家」体制も、剥き出しの暴力によって体制が維持される「テロ（恐怖政治）国家」である点では共通している。エジプトもまた初代のナギーブ以来軍人が大統領職を独占し、1981年のサダトの暗殺後現在に至るまで緊急事態法が解除されておらず、典型的な「テロ国家」の一つである\*2。

1992年、ムバーラクは、大統領就任以来の対イスラーム主義宥和政策を放棄し、イスラーム主義の根絶を目指す弾圧政策に踏み切った [中田 1992: 21-31]。しかしその結果はイスラーム主義の壊滅ではなく、武装闘争派による武装闘争の開始であった。1993年には100人の治安関係者を含む211人

\* 1 国家が暴力装置であることにおいては同一であっても自由・民主主義体制をとる「西側先進」諸国と、旧共産圏及び第三世界の国々の間では国家の暴力性の表象には顕著な差異が見られる。前者においては国民の自発的な合意、「社会契約」のフィクションが支配の正当性の根拠として強調され、国家が暴力装置であることは隠蔽される傾向が強い。

松葉が「こうしてシュミットは『民主主義に属しているものは、必然的にまず第一には同一性であり、第二には——必要な場合には——異質なものの排除または殲滅である』とする。このシュミットの民主主義の本質についての分析は根源的であり、我々が『民主主義の両義性』と呼ぶことになるものを考えようとするときに避けて通れない地平を形成している」と指摘している通り [松葉 1995: 54]、前者の国々では「国民」形成の過程で政権へのラディカル（根底的）な反対者、異質な要素は予め根絶させられているため、現行の秩序の維持には通常の「犯罪者」に対する以外には生の暴力の行使は必要とされない。これらの国々では「シビリアンコントロール」の理念が名実ともに浸透しており、市民の日常生活の中では軍や警察の姿はあまり目立たない。

後者の国々では、そもそも多くの場合為政者が軍部の出身であり、軍と警察が政権の主たる支持基盤であり、国家は出自からして明白な軍事・警察国家である。それに加えてこれらの国々では、街角の隅々まで制服の警官と軍人が配備され市民に監視の目を光らせており、戒厳令体制が常態であるなど、国家の暴力性は可視的であるばかりか、むしろこれみよがしに強調されている。つまりこれらの国々は言葉の本来の意味でテロ（恐怖政治）国家なのである。

そして「民主主義の擁護」を口にした「異質なもの（イスラーム主義者）」の殲滅に狂奔するアルジェリアの軍事政権は、我々に「民主主義国家」生成のプロセスをまざまざと見せつけてくれている。

\* 2 エジプトは中東の典型的な国家システムである軍事独裁テロ国家の一つである。しかし他方ではイスラーム世界の最高かつ最大のウラマーウ集団であるアズハル機構の存在、旧王制下でまがりなりにも存在した政党政治の記憶、清廉なリベラリスト知識人の存在、司法権の相対的独立、強力なアイデアオロギーと組織を持つ政権党の不在、開放的な国民性などが、エジプトの政治に他のアラブ諸国とは異なる独自の色彩を与えているのも事実である。

の市民と6人の外国人が死亡した。そしてその後も上エジプトを中心に、イスラーム主義武装闘争派による所謂「テロ」事件が連続しており、治安当局の苛酷な弾圧にも拘わらず、1997年11月現在に至るまでその活動は一向に沈静化を見ておらず、特に上エジプトにおける「イスラーム集団」の闘争は既にルーティーンと化しており、1997年11月17日にはルクソールで60人以上の死者を出した観光客襲撃事件が発生している\*3。

軍事独裁テロ国家の治安機構による苛酷な強権的弾圧と、官製のマスメディアを総動員したイデオロギー攻勢にも拘わらず、何ゆえエジプトのイスラーム主義武装闘争派の闘争は継続しているのであろうか。

国家の暴力性の問題の分析を怠り、個々の運動の置かれた状況を捨象し、「イスラーム・テロリズム」などといった愚劣な概念を弄ぶことは、イスラーム主義とイスラーム世界に対する誤解を増幅させるのみである。我々は、苛酷な弾圧下での闘争を生命を賭して戦い抜くイスラーム主義武装闘争派の強靱な行動と思想の論理を事柄に即して明らかにしなくてはならない。

最近のイスラーム主義者に関する「事件」のほとんどは「ジハード連合」、特に「イスラーム集団」が関与するものであるが、注目に値するのは、1996年春の「ムスリム集団」、通称「タクフィール・ワ・ヒジュラ（背教の烙印と聖遷）」のメンバー245名の一斉検挙である。

1977年のアル＝ザハビー元宗教相の誘拐

殺害により、名を馳せた「ムスリム集団」は、エジプトの所謂「イスラーム原理主義」に関する論述の中では代表的「過激派」として必ず引き合いに出されるが、指導者シュクリー・ムスタファーの処刑以来、彼らの引き起こす「事件」が新聞の一面を賑わすこともなかった。

本稿では、新資料に基づき「ムスリム集団」の現状を先ず明らかにし、20年にわたる「共存」の後、今になって、「ムスリム集団」に大量逮捕の手が伸びた背景を探る。次いで「ムスリム集団」と「イスラーム連合」との比較を行う。両者の比較によって、「イスラーム原理主義」、「イスラーム過激派」、「イスラーム・テロリズム」といった粗雑な分類によっては見落とされるそれぞれの組織の思想的特性が浮き彫りになると思うからである。

## I. 旧「ムスリム集団」

### 1. 創設からシュクリーの処刑まで

1950-60年代のエジプトでは、ナセル独裁体制によるイスラームの弾圧により、当時国内最大のイスラーム主義団体であった「ムスリム同胞団」が非合法化され、団員の多くが投獄、拷問され、残虐な仕打ちを被った。こうしたイスラームに対する弾圧と迫害の状況下において、獄中のイスラーム主義者の中で、エジプトの政体、ひいてはエジプト社会全体を、イスラームから離教した不信仰の状態にあると断ずる「タクフィール（不信仰者の烙印を押すこと）」の思想が生まれた。「ムスリム同胞団」の

\*3 イスラーム主義武装闘争の反体制闘争のクロノロジーについては、『中東研究』に毎月掲載されている巻末「中東各国動向」欄を参照。

イデオログ、サイド・クトゥプ (d. 1966) の「ジャーヒリーヤ (無明)」論はその先鞭をつけるものであった。

クトゥプの信奉者たちは彼の処刑後、「ジャーヒリーヤ」論の解釈を巡って、(1)不信仰のジャーヒリーヤ社会との物理的に完全な絶縁 (ヒジュラ) の必要を唱えるグループと、(2)イデオロギー上の絶縁、対決を意味すると解するグループに思想的に二分された。

獄中の前者 (タクフィール・ヒジュラ) のグループの指導者がアズハル出身のイスラーム学者シャイフ・アリー・アブドゥフ・イスマーイルであった。彼を支持するグループは彼に忠誠を誓わない他の全てのグループをタクフィールしたが、これに応じて獄中で見解を異にする諸グループが分立し互いにタクフィールしあう状況が生じた。このシャイフ・アリーの組織こそが「ムスリム集団」の前身である。

イスラーム主義者の分裂、対立の事態を憂慮した当時の「ムスリム同胞団」の最高指導者アル＝フダイビーの仲介と説得により、1969年の夏にシャイフ・アリーが劇的な回心を果たし、タクフィール思想を放棄すると、彼のグループは四散した。しかしその中で唯一人その教義を奉じ続けたのがシュクリー・ムスタファーであり、やがて彼の従兄弟マーヒル・バクリーが彼に従う

ようになった [Kepel 1985: 75-76]。

シュクリーは1942年エジプト南部のアシュートから南30キロに位置するアブー・フルス村にウムダ (村長) の息子として生まれた。彼はアシュート大学の農学部に入學し、おそらくこの時期に「ムスリム同胞団」に加入したものと思われ、1965年に「ムスリム同胞団」の出版物を学内で配布したかどで逮捕された [Kepel 1985: 73-74]。

シュクリーは獄中において、教友や四大法学祖をはじめとするいかなるイスラーム学者のファトワー (教義判断) に従うことも禁じ、それを犯すものは不信仰者であると唱えた。彼によるとただ一人の指導者をいただく「ムスリム集団」のみがムスリムであり、「ムスリム集団の指導者」に忠誠を誓い、ターゲット (為政者) や不信仰者たちと絶縁するヒジュラの生き方のみが、アッラーフによる人類の根絶に際して、救済され地球を相続する唯一の道となる。獄中の「ムスリム同胞団」員たちはシュクリーのこの教えを拒絶したが、9人だけが彼に従った、これが「ムスリム集団」の成立である [Sābir 1994: 38-39]\*4。

1971年に釈放されるとシュクリーとその信奉者たちはアシュート周辺で宣教を開始した。間もなくアズハル大学卒業生クトゥプ・サイド・フサインが「ムスリム集団」

\* 4 サービルはこの箇所では創立メンバー9人のうち、1. ムハマンド・アル＝アミン・アブド・アル＝ファッターフ (アブー・ガウス)、2. ワヒード・ウスマーン (アブー・サルマーン)、3. サイド・アブド・アル＝ラフマーン (アブー・ナーフィウ)、4. アブド・アル＝ファッターフ・カーシム (アブー・アマラ)、5. ファウズィー (アブー・ジャウファル)、6. ムスタファー・アル＝ジャマル、7. ムスタファー・アル＝ザイニーの7名の名を挙げているが、33ページでは、創立メンバー9名が集まって、前イマールのアブー・ガイスを廃位したと述べており、記述に混乱が見られる。また既述のようにケペルはシュクリーに最初に従ったのは従兄弟のマーヒル・バクリーであったとしているが、サービルは彼の名に言及しておらず、「ムスリム集団」の発足の事情については、まだ検討の余地がある。

に加わった。彼らは急速に団員を増やし、1973年には団員の一部が逮捕され、シュクリーの著作が押収された。1976年には「ムスリム集団」の団員は数千人を数えるに至っていた。ところが対立するイスラーム主義団体が「ムスリム集団」のメンバーを勧誘し、「ムスリム集団」が脱会者に懲罰を加えるに及び、治安当局が介入し、マスメディアは「ムスリム集団」を誹謗するキャンペーンを行い、シュクリーにも逮捕の手が迫った。

彼は逮捕を逃れて地下に潜伏し、「ムスリム集団」が「公然宣教 (balāgh ‘āmm) 段階」に入ったとして、潜伏先からコミュニケを送付し、「ムスリム集団」への誹謗を正すために彼のコミュニケをマスメディアに掲載し、投獄されたメンバーに陳述の機会を与えるために彼らを法廷に引き出すように求めた。しかしシュクリーの要求は全て黙殺され、コミュニケは掲載されず、公判は開かれなかった [Kepel 1985: 76-78]。そこでシュクリーはアル＝ザハビー元宗教相を誘拐し、投獄されているメンバーの即時釈放、主要紙の「ムスリム集団」に対する誹謗の謝罪文掲載、彼の著作『カリフ制』の出版許可、20万ポンドの現金などを要求したが、結果は当局による更なる弾圧の強化を招いただけであった。アル＝ザハビーが死体で発見されると当局はシュクリーをはじめ数百名のメンバーを逮捕した。シュクリーは、アズハル総長アブド・アル＝ハリーム・マフムードの裁判への召喚を求めたが拒否され、シュクリーら5名の指導者は軍事法廷による即決裁判により処刑された [Kepel 1985: 78, 96-97, 100-101]。

## 2. 思考と行動

「ムスリム集団」は思想的に他のイスラーム主義諸組織と決定的に異なる。エジプト政権、エジプト社会を「ジャーヒリーヤ (無明, 非イスラーム社会)」、不信仰と断じる、つまり「タクフィール」自体は、学問的には議論の余地はあっても、むしろ常識に適うものである。それは、国民の大半が名目的に仏教徒ではあっても、今日の日本を仏教国、仏教社会と呼ばない、といった我々の常識的理解からもそう遠くないとも言えよう。また一旦社会をタクフィールした以上、イスラームから離反した社会との絶縁を要請することも、伝統的イスラーム学の古典にも既に述べられている正統教義の一部に過ぎない。「ムスリム集団」を他のイスラーム主義諸組織から分けるのは、サラフ (先人, 教父) の信憑性、イスラーム学の伝統の全否定である。シュクリーは、クルアーンとスンナを理解するのに必要なのは良いアラビア語辞典だけであり、古今のイスラーム学の業績は全て不要であると言う。シュクリーによると、スンナ派正統四法学祖への服従を説く古典イスラームの教義は、時の権力に阿諛追従する学者たちによる虚偽の教えであり、法学祖たちは多神教徒の拝む偶像にほかならない [Kepel 1985: 79-80]。

クルアーンとスンナの直接的参照、解釈 (イジュティハード) の強調は、スンナ派イスラーム主義の主流をなすサラフィー主義の主張でもある。しかしサラフィー主義者は、クルアーンとスンナの理解には、クルアーンとスンナを現在に伝えてきた四大法学祖らに連なるサラフの道に従うことが

不可欠であると考え。従ってサラフィー主義のイスラーム主義者は武装闘争派であるか否かを問わず、クルアーン学、ハディース学、教養学、法学などの古典の校訂、出版、研究に余念がなく、古典イスラーム学の基礎研究に基づいて現状分析を行い、宣教の戦略を考える。

イスラーム学の伝統を否定する「ムスリム集団」は、サラフの伝統の正統な継承者を自認する他のイスラーム主義諸組織とは根本的に異質なのである\*5。

シュクリーによると、エジプトは不信仰が支配し「ムスリム集団」は権力の迫害を受けており、マディーナへの聖遷以前のマッカでのムスリムと同じく、イステイドゥアーフ（被抑圧、弱体）の状態にある。エジプトはムスリム集団を迫害する「ダール・ル・ハルブ（戦争の地）」であり、「ダール・ル・ハルブ」では金曜集団礼拝は舉行されない。

またイステイドゥアーフの状況下では敵との争いは避け逃避するのが、「ムスリム集団」の方針である。外敵イスラエルも内なる敵エジプト政権も敵であることに変わりない以上、「ムスリム集団」はエジプト軍に加わりイスラエルと戦うことも拒否する [Kepel 1985: 82-84]。

エジプト政府、エジプト社会からの絶縁を唱える「ムスリム集団」は、徴兵を拒否するのみならず、政府の役職につくこと、公立の学校に通うことも認めず、国家権力との絶縁はそれなりに徹底したものであった。しかし団員の多くが都市部の家具付アパートで共同生活を送っており、また農業、

行商、修理工などの仕事が認められていることから社会との絶縁は完全なものではなかった。

「ムスリム集団」のヒジュラには二つの形態がある。

第一は、家具付アパートにおける団員の共同生活であり、国内におけるジャーヒーリーヤ（無明、非イスラーム社会）からのヒジュラである。

第二の形態は、国外移住である。団員の一部はイエメンや、サウディアラビア、クウェート等の湾岸諸国に移住していた。この場合には彼らは本国への送金を義務づけられており、湾岸諸国からの送金はエジプト国内の「ムスリム集団」の重要な資金源となっていた [Kepel 1985: 89-90]。

この時期の「ムスリム集団」の基本思想と行動は、イスラーム学の伝統の否定、エジプトにおける自己の現状のイステイドゥアーフとの位置づけ、エジプト政府・社会との絶縁、と纏めることができよう。

## II. 新生「ムスリム集団」

### 1. 資料

1994年6月、『アフバール・アル＝ヤウム』紙の記者サービル・シャウカによる『テロリストの実習』と題するルポが出版された。

サービル・シャウカは1993年8月から12月にかけての約4ヶ月間、入会志願者を装ってエジプトのイスラーム主義諸組織に潜入した。『テロリストの実習』は、その体験をもとにイスラーム主義諸組織の「実態」を克明に描いたものであり、反イスラ

\* 5 イスラーム主義運動一般の思想傾向については、小杉 [1994]、中田 [1992c; 1995; 1996] 参照。

ーム主義に対する偏見による歪曲を差し引いても\*6、多くの貴重な情報に富む優れた業績である。特に現指導者ワヒード・ウスマーンの多くの写真を含む「ムスリム集団」についての記述は、シュクリー処刑後の活動については、アラブ圏の研究者の間でも殆ど知られていなかった現在の「ムスリム集団」の実態に一条の光を投げかけるものである。

そこで本章では従来の研究に加え、『テロリストの実習』を資料として用いて、現在の「ムスリム集団」の思想と実態について概観する。

## 2. 再結成

シュクリーの処刑後、「ムスリム集団」の幹部の一人ムハンマド・アル＝アミン・アブド・アル＝ファッターフ（通称アブー・ガウス）はサウディアラビアに逃亡し、残党を再組織化し新しいイマーム（最高指導者）となった。

アブー・ガウスは、世界中で「ムスリム集団」の団員のみがムスリムであり団員以外の全人類が不信仰者であることを改めて強調し、「ムスリム集団」の団員にはアブー・ガウスがシュクリーから継承した以下の6つの掟の遵守が課せられた。

①イマーム以外はファトワー（イスラーム

教義判断）を出さない。

②イマームの許可なく結婚しない。

③組織の維持のため、全団員は年収の3分の1をイマームに収める。

④イマームの許可なく、外国に移住（ヒジャラ）しない。

⑤これらの掟に背いただけでは団員はタクフィールはされない（不信仰者とはみなされない）。

⑥掟に背いた者は、悔い改めるまで、団からの追放の刑を受ける。

団員の年収の3分の1を徴収したアブー・ガウスは巨富を蓄え、彼の口座の預金額は1億8800万ドルに達していたとも言われる。彼はサウディアラビアの宮殿に住み、自家用機で世界各国の団員の間を巡幸する生活を送っていた。しかしアブー・ガウスの独裁と組織の資産の私物化に対し、1994年初頭、創立メンバー9名は協議の結果アブー・ガウスをタクフィールし、Dr. ワヒード・ウスマーン（小児科医）を世界各国に散らばる団員全ての新しいイマームに選り、ファックスや電話によって団員の90パーセントは新イマーム、Dr. ワヒードに忠誠を誓った。

現在の「ムスリム集団」の指導部は、Dr. ワヒードと、アル・ザハビー元宗教相殺害事件による10-15年の刑期を終えて出

\* 6 「悪魔的」などの無内容な形容を多用していることを除けば、イスラーム主義の論理、及び先行研究に照らして、サービルのインタビューを行った「ムスリム集団」の主張に歪曲を加えずほぼ忠実に記録していると思われる。

『テロリストの実習』は、サービルの「ムスリム集団に」に関するルポに事実と反する記述が3点ある、との「ムスリム集団」現イマーム Dr. ワヒードからの抗議文（『アフパール・アル＝ヤウム』1993年12月30日掲載）を掲載している。

その抗議文によっても事実と反するとされているのは、(1)「ムスリム集団」ではイマームにファトワー発布の独占権があること、(2)Dr. ワヒードの顔写真の下「(彼の考えでは) 全てはハラーム（禁止）である。」とのキャプション、(3)「社会との接触の不在」の3点のみであることから、逆にこのルポの信憑性が推定できる [Sabir 1994: 209-210]。

獄した者らを中心とする古参メンバー9人からなる諮問委員会から構成される。新指導部は、『『ムスリム集団』』に入会しイマームに忠誠を誓うことによるのみ、人はムスリムとなる」との原則を再確認した上で、既述の6つの掟を廃止し、「イマームのみがファトワーを出すこと」を唯一の掟と定めた。

現在「ムスリム集団」は国内の主要拠点はバルブース、ザカジーク、ミート・ガムル、バンハー、スエズ、ギザ、ハラム、イスタブル・アンタル、イズバト・アル＝ナフル、インバーバ、アルミニア、タフター、スハーグなどの諸都市であるが、国外では湾岸諸国、イエメン、アルジェリア、スーダン、スウェーデンなどの国々に団員が移住している [Sābir 1994: 30-34]\*7。

### 3. 日常生活

サービルは2週間にわたってイスツバル・アンタルとイズバ・ハイル・アッラーフで「ムスリム集団」と生活を共にしたが、その模様は以下のものであった。

彼らのもとでは毎週1回、朝の8時から、夜の8時までの勉強会が開かれる。サービルはある友人と共に、勉強会の主宰者ファウズィー（諮問委員会委員）の家に泊まることになった。ファウズィーの家は、「家」というよりむしろ岩窟であり、屋根も床もなく、岩肌面に敷いた毛布の上で、彼らはファウズィーと5人の子供と共に眠ることになった。ある夜サービルは友人の叫び

声で目を覚ました。暗闇の中で手に触れるものを掴んでみると、手の平ほどもあるサソリだったからである。ところがファウズィーは、少しも驚かず微笑みながら言った。

「アッラーフは誉むべきかな。アッラーフの創造の奇跡を見たかね。なんと立派なサソリではないか。恐れることはない。ここには沢山住んでいるのだよ」 [Sābir 1994: 35]。

身の毛もよだつ思いをしたサービルはまんじりともせずそこで一晩を過ごした。

ファウズィーはかつては豪華マンションに住む高級官僚であった。しかし彼は、アッラーフの敵である政府の官職につくことがハラーム（禁止事項）であると悟り、その職を投げ打ち高額の年金の権利をも放棄し、山に籠って同志の住居作り身を捧げた。5人の子供も学校、電話、電気などという現世の事物を一切知らず、岩窟の中でボロを着て育てられている。これはサービルの理解を越えていた。

サービルはファウズィーらに「なぜあなたがたは生活を捨てて、こんな危険な野蛮な土地に住むのか」と尋ねるとファウズィーに代わって同じく「ムスリム集団」の諮問委員会委員であるアブー・オカーシャが静かに答えた。

「ここが危険だと誰が言ったのか。この生活は、電気や水道などなくとも、清らかで美しい。我々はここで子供たちとともに平和に暮らしている。我々は、この世での安楽は一切求めない。我々は水だけあれ

\* 7 サービルが9名の創立のメンバーとして名をあげている者のうちで、現諮問委員会メンバー9名の中で固定できるのは、1. アブド・アル＝ファッターフ・カーシム（事務局長、法学、私設学校教育担当）、2. ファウズィー（女性・住宅担当）、3. サイド・アブド・アル＝ラフマーン（ピラミッド地区宣教担当）、4. ムスタファー・アル＝ジャマル（上エジプト宣教担当）の4名である。



ば十分だ。学校や、電気や、この世の安楽は我々には必要ない」[Sābir 1994: 35]。

しかし「ムスリム集団」の全てのメンバーがこのように社会から隔離され山に籠って生活しているわけではない。Dr. ワヒード自身が必要に迫られてシャルキーヤ県のバルピースの保健所で小児科医として働いており、メンバーの若者に建築業や商売などの職業訓練を施していることも認めている [Sābir 1994: 42-43]。

またサービルによると「ムスリム集団」は露店の時計商に身をやつて若者や女性を対象に教えを広めており、その規模は全国レベルでも顎鬚を生やした露店の時計商の殆どを「ムスリム集団」のメンバーとみなすことができるほどに達しているという [Sābir 1994: 40]\*8。

#### 4. 思想の現在

クルアーンとハディース以外は一切の権威を否定する「ムスリム集団」の思想はシュクリーによる創立以来大きな変化はない。

Dr. ワヒードは、彼が『「イマームのみがファトワーを出すこと」を『ムスリム集団』の唯一の掟とした』とのサービルの記述を誹謗であるとして否定し、ファトワーを出し得るのは、アッラーフだけであると、[イジュマーウ（学者のコンセンサス）、キヤース（類推）……（中略）……などといったものは全て、人々がアッラーフを差し

置いて拝む偶像に過ぎない』と述べ、イスラーム法の個々の法判断ではなく法源自体を否定する [Sābir 1994: 209]。また彼は、教友、法学祖、法学者たちが「正しい意図を持っていたと誰が保証できるのか。我々は15世紀を遡って、アッラーフの使徒の生き方に倣って純朴な生活に戻る」と述べ [Sābir 1994: 43]、今日に至るまでのウンマ（イスラーム共同体）によるアッラーフの使徒ムハンマドの教えの継承の正統性を全否定する。また Dr. ワヒードは「我々には辞書があり、アッラーフの規範を演繹する能力がある」とも述べる [Sābir 1994: 42]。

「神学的」にイマームにファトワー発布権を認めるか否かはともかく、イマームへの忠誠こそが、「ムスリム集団」の教義の要である。彼らは「ムスリム集団」のイマームこそが全てのムスリムの唯一のカリフであり、「ムスリム集団」のみがムスリムであることを強調し、その結果としていかなる学派 (madhhab), 分派 (firqa) も認めない [Sābir 1994: 39, 42-45]。

個人のレベルでも、社会レベルでも、「ムスリム集団」のイマームへの忠誠を誓うことがイスラーム教徒となる必要不可欠な条件である\*9。

Dr. ワヒードは言う。

「ムスリムになりたいと望む者はイスラームを実践し、礼拝し、齋戒するだけでは

\* 8 現在の「ムスリム集団」の成員数に関する筆者の質問に答えて、サービルは約10万人との見積もりを示している。

\* 9 1981年に「ムスリム集団」を脱退した古参幹部の一人ラジャブ・マドックールによると、「ムスリム集団」帰属は1975年初頭までは、必ずしもムスリムたることの必要条件とはみなされておらず、またシュクリー・ムスタファー自身は、イステドゥアーフの状況下ではカリフの資格を義務を果たし得ないことから、自分自身をムスリム全体の唯一のカリフではないと明言し、「ムスリム集団」の指揮者の地位に甘んじていたのであり、初めてカリフを名乗ったのはアブー・アル＝ガウスである [Rajab 1985: 239-240]。

十分ではない。ムスリムになるためには、我々に加わり、我々の前で信仰告白を唱え、私 (Dr. ワヒード) を全てのムスリムのイマームと認めて忠誠を誓わねばならない」[Sābir 1994: 42]。

また彼は、エジプトがもしシャリーアの全てを施行すれば「ムスリム集団」は社会復帰するかとのサービルの問いに対して「エジプトが明日からシャリーアを施行しようとも、そんなことに我々は関心はない」と答え、社会がムスリム社会となるためには「世界の為政者たちの誰であれ、まず為政者が我らの『ムスリム集団』に加入し、我々の前で信仰告白を唱え、私を全てのムスリムのイマームと認めて聴き従うとの忠誠を誓わねばならない」[Sābir 1994: 45] と述べる。

「ムスリム集団」にとって主要な関心はイマーム (指導権) であって、シャリーアの施行ではない。これは他の全てのサラフィー主義のイスラーム主義運動が、イスラーム国家のメルクマールとしてシャリーアの施行を目標に掲げているのと好対照を成している。

またイスラーム復興運動の担い手であるサラフィー主義者の多くは理工系の出身であり、イスラーム運動も勝利のためには科学・経済・軍事的進歩が不可欠だと考える。この点においても「15世紀を遡って、アッラーフの使徒の生き方に倣って純朴な生活に戻る」と文字通りの預言者時代の生活への回帰を唱える「ムスリム集団」は他の復興主義運動とは全く異質である。Dr. ワヒードは言う。

「実際に我々は15世紀以前の生活に戻っており、人々を『ムスリム集団』の従う天

国への道に招いているのである。エジプトのモスクでの礼拝は行わない。なぜならそれは『不信仰の巣窟』だからである。また、エジプトの学校に子供たちを通わせはしない。なぜなら学校も『不信仰の巣窟』だから。我々は不信仰のエジプト社会とはつきあわない。また我々は出生届、婚姻届、身分証明書、パスポートなど我々を地獄へ追いやる『文明』の諸装置とも関わらない」[Sābir 1994: 43]。

また「ムスリム集団」が社会と完全に絶縁しているとのサービルの記述に対し、Dr. ワヒードは、それは事実を反し、またシャリーアに照らしても許されないと反論する。Dr. ワヒードは言う。

「我々には社会からの離脱は許されない。それは(「ムスリム集団」の教義の) 伝達 (balāgh) を完遂し、明証を示した後であり、その時には離脱 (itizāl) する。それは一部の輩の唱えるような『心情のうえでの離脱』ではなく、ターグート (邪神) どもの支配する土地からアッラーフの書 (クルアーン) のみによって統治される土地への完全な移住 (hijra) となる」[Sabir 1994: 410]。

つまり「ムスリム集団」の国内での活動の目的は、「ムスリム集団」の教えの伝達のみであり、それを伝え終えれば外国への亡命が企図されているのである\*10。

Dr. ワヒードによると、移住先の条件は公正な政治の行われている国であることであり、異教徒の国であっても構わず、アラブ諸国のみはこの条件に適わないが、ヨーロッパの国々をはじめ世界のほかの地域はどこでも移住可能である。ただしアラブ諸国で唯一の例外が、預言者ムハンマドが

「叡知の国」と呼んだイエメンである。イエメンではムスリム集団の多くのメンバーが全く自由に活動しており、イエメンの為政者（アリー・サーリフ）は不信仰者ではあるが正義の為政者である、とDr. ワヒードは述べる [Sabir 1994: 44-45]。

移住 (hijra) はイスティドゥアーフの現状認識から帰結する過渡的な段階である。しかし最終的な理想の実現に関しては、ムスリム集団にはポジティブな具体的な戦略はなく、極めて終末論的である\*11。

サービルの「あなたがたは最終的には何を望んでいるのですか」との問いに答えてDr. ワヒードは言う。

「我々は、この世では弱体な被抑圧者であり続けるが、最後にはこの地と地上にあるもの全てを相続することになろう。

アッラーフの使徒は、世界がやがて不信仰に陥り暴虐の限りを尽くし互いに滅ぼしあったところで、『ムスリム集団』が槍と馬によってイスラームの旗印を掲げて進軍する、と予言されている。

既に邪悪な共産主義の（ソ連）帝国の滅亡によって（アッラーフの使徒の）予言の一部は成就した。我々はアメリカとヨーロッパが互いに滅ぼしあうのを待っている。その時、我々は槍と馬をもってイスラーム

の勝利のために進軍し、世界の隅々にまでイスラームを弘めるであろう」 [Sabir 1994: 43]。

### III. 「ムスリム集団」とイスラーム主義武装闘争派

#### 1. 「ムスリム集団」の思想の特徴

以上の概観からも明らかのように「ムスリム集団」は、今日のスンナ派世界のイスラーム主義運動のなかでも極めて特異である。そこで「ムスリム集団」を他から分かつ特徴を以下に纏めてみよう。

①教友以来のウンマの権威、イスラーム法体系、イスラーム法学方法論の全否定

上の3つはいずれもスンナ派のアイデンティティーの根幹である。従ってこれらを全て否定する「ムスリム集団」はスンナ派の範疇には入らない。

②権力志向とイマームの重視

「ムスリム集団」として、個人と社会がムスリムであるか否かを定めるメルクマールはシャリーアの実践ではなく、Dr. ワヒードのイマームへの忠誠、あるいは「ムスリム集団」という組織への加入である。つまり他ならぬDr. ワヒードの率いる「ムスリム集団」によって地上に覇権が確立される必要があるのである。この点において

\*10 「ムスリム集団」の教義によるとヒジュラ（忌避、離脱、移住）は、以下の7段階に分かれる。

- (1) アッラーフによる禁忌、アッラーフ以外の神々、悪行のヒジュラ
- (2) 多神教徒（「ムスリム集団」団員以外のムスリム）たちの寺院のヒジュラ
- (3) 多神教徒たちの慣習のヒジュラ
- (4) 多神教徒たちの衣装のヒジュラ
- (5) 多神教徒たちの社交場や組織のヒジュラ
- (6) 多神教徒たち自身に対するヒジュラ
- (7) 多神教徒たちの土地から別の土地へのヒジュラ

新天地への移住の完了した第7の最終段階においてのみ、多神教徒たちの偶像崇拝から絶縁した「ムスリム集団」のみによる純粋な唯一神崇拝が成就される [Rajib 1985: 160]。

\*11 「ムスリム集団」の団員たちは、彼ら独自の計算により、1983年に第三次世界大戦が勃発し、最終的には漁夫の利を得た「ムスリム集団」が世界を支配すると信じていたと言われる [Rajib 1985: 279]。

「ムスリム集団」は、シャリーアの施行のみを目的としてその施行主体が誰であるかについては理論的関心を示さない他のスンナ派イスラーム主義運動とは異なる志向性を有し、むしろある意味ではイマーマを教義の中心に据えるシーア派に近づいているとさえ言える。

### ③反近代主義

「ムスリム集団」は、クルアーン、ハディースの言葉の指した具体的状況の文字通りの再現を目指すため、15世紀を遡って預言者ムハンマドの生活様式自体に倣うことが目標となる。

一方他のイスラーム主義運動においては、クルアーン、ハディースから一旦演繹された法規則の適用、法の精神の実現を考えるため、近代的生活様式が全否定されることはない。「ムスリム集団」以外の運動は、工学、医学、法学、経営学などの実学を修めた者が運動の主たる担い手となっていることが多く、むしろ不信仰者との競合に勝ち抜くために「近代化」はイスラーム復興の条件とさえみなされる傾向が強い。

ただし「ムスリム集団」の反近代主義は非現実的ではなく、ましてや時代錯誤的でも狂信的でもない。エジプトより遥かに生活水準が「高く」、科学・技術の「進んだ」アメリカにおけるアーミッシュ共同体の繁栄の事例からも [クレイビル 1996]、今日でも、社会との接触を必要最小限に押さえ近代文明を極力拒否し、中世的生活様式を維持することが可能なことは実証済みである。エジプトは基本的に依然として遅れた農業国である。またケペルが指摘するように大学卒業者に相応しい職業が保証されず、上エジプト地方の一部ではいまだに電気、

水道、ガスなどの「現代文明の思想」に浴さない生活を強いられる者が少なくないような現体制下では、多くの若者にとって「ムスリム集団」の反近代主義は「主体的」に選り取られた「現実的」選択なのである。「ムスリム集団」の名が半ば忘れられた権力の弾圧の緩んだ近年の「ムスリム集団」の急速な伸長は、彼らの主張が「現代的・文化的」な生活が誰にでも保証されているわけではないエジプト社会において大きな説得力を有することを裏付けるものと言えよう。

### ④終末論・他力救済

「ムスリム」集団は、預言者ムハンマドの予言する終末が近いとの現状認識に立ち、予言通りに敵対勢力の自滅により、ある意味での「他力救済」により「ムスリム集団」の勝利がもたらされたと考える。権力の迫害を避け、国外に移住するか、教義を社会の隅々まで伝えるために国内に止まりつつも、社会との接触を最小限に押さえ自律的な生活を送る以外に、「ムスリム集団」は、自前の具体的な政治的プランを持たない。「ムスリム集団」は本質的に終末論的・他力救済志向なのである。この「ムスリム集団」の終末論的・他力救済志向は「自力」によるイスラーム国家実現を目指し、そのための戦略を考える今日の他のイスラーム主義運動には見られない特徴である。

### ⑤非暴力主義

「ムスリム集団」は、自らがイステイドゥアーフの状態にあるとの現状認識に立ち、マッカ時代のムスリムに範をとり、権力の弾圧に対しても抵抗せず迫害を逃れて逃避(hijra)するのみである。彼らは社会改革

を目指して実力行使により「勸善懲悪（善の命令と悪の阻止）」を行うこともなく、「非暴力」路線を貫く。

「ムスリム集団」の非暴力主義は、不信仰に陥った為政者の武力による打倒を義務と考える武装闘争派諸組織と対照的であるのみならず、イスラームにおける社会改革の基本原則として「勸善懲悪（善の命令と悪の阻止）」を旗印に掲げ、状況によっては実力行使によるシャリーヤの施行をも辞さない体制内改革派イスラーム主義諸組織とも一線を画している。

もちろん、「ムスリム集団」の非暴力主義は、イステドゥアーフの現状認識に基づき、あくまでも現状における現実的な戦略に過ぎない。「ムスリム集団」の非暴力主義が、ジャイナ教の絶対的不殺生主義のような絶対的非暴力主義ではないことは言うまでもない\*12。

## 2. 「ジハード団」、「イスラーム集団」

### との比較

①教義、②現状認識、③活動方針、④権力への志向性、⑤国際化の4つの点から3組織を比較すると以下のようなになる\*13。

#### ①教義

「ジハード団」と「イスラーム集団」は共にサラフィー主義を思想的基盤とする。

サラフィー主義は強烈なスンナ派本流意識を有する超正統主義であり、シーア派などの「異端」は言うに及ばずスーフィズムと法学派の権威を重んずるスンナ派伝統主

義とも鋭く対立する。サラフィー主義はサウディアラビアの「公認」教義であるほか、現代のイスラーム復興運動の主流でもあり、「ジハード団」、「イスラーム集団」は宣教、移動、メンバーのリクルートなどで世界に広がるサラフィー主義ネットワークを活用することが出来る。しかし一方でエジプトのムスリム「一般信徒」と「宗教界（アズハル機構）」のマジョリティーはサラフィー主義を不倶戴天の敵とするスンナ派伝統主義の信奉者である。それゆえサラフィー主義への立脚は「ジハード団」と「イスラーム集団」の反政府武装闘争が全国的な反体制運動として展開出来ない阻害要因ともなっているのである。「ムスリム集団」は預言者ムハンマド以後のイスラーム学の遺産の全てを否定する非学問的運動であり、そもそもスンナ派の範疇にも入らないため、勢力の拡大には限界がある。しかし学問と言論の自由が抑圧され、権力に常に迎合するその姿勢によって「曲学阿世の徒」との謗りを受け、アズハルのウラマーウ（イスラム学者）の権威が地に堕ちているイスラーム世界の現状では、今後も社会の周辺部で一定の支持者を集めることは可能であろう。

#### ②現状認識

「ジハード団」と「イスラーム集団」は共に現在のイスラーム世界を、イスラーム法の否定によって「ダール・アル＝ハルブ（戦争の家）」に転化したジャーヒリーヤ（無明）社会と考え、イスラームを実践す

\*12 たとえばアフガニスタンのジハードには「タクフィール・ワ・ヒジュラ」のメンバーも参加していたと言われている [中田 1992b: 27-31] 参照。また1994年2月に未確認ながらスーダンのハルトゥームで20名以上の死者を出した「スンナの擁護者モスク」襲撃事件は、「タクフィール・ワ・ヒジュラ」によるものと報じられた [AL=Hayat, 1994/2/6]。

るカリフ国家の不在にあつてはカリフ国家の樹立が義務であり、そのためにはイスラームを抑圧する既存体制とのジハードが不可欠であると考ええる。

しかしジハードの時期については、「ジハード団」は短期・中期的にも当面はその準備期間であると考え、また長期的にもエジプト民衆の総体としてのジハード思想の受容には悲観的である。

これに対し「イスラーム集団」は、現状における「善の命令と悪の阻止」の原理の実践により、民衆の教化を進め、既存体制の打倒につながるジハードへと導くことが可能だと考える。

「ムスリム集団」は、イスラーム世界全体が「ダール・アル=ハルブ」に転化したとの認識においては「ジハード団」、「イスラーム集団」と一致するが、世界全体が「ダール・アル=ハルブ」化した現在では、世界中で「ムスリム集団」のメンバーのみがムスリムであり、またそのカリフは「ムスリム集団」のイマーム Dr. ワヒードその人に他ならないと考える。「ムスリム集団」は世界が「ダール・アル=ハルブ」である現状においては「ムスタダアフウン（被抑圧者、弱者）」であるが、近い将来敵たちが互いに争い自滅し、最後の勝利を得ると考える。

### ③活動方針

「イスラーム集団」は民衆革命を信じ、不信仰の政府の打倒を訴え、公然たる宣教と「善の命令と悪の阻止」の実力行使を継続しており、治安当局との衝突を繰り返している。

一方の「ジハード団」はクーデターによる政権打倒を目指し、秘密組織としての教宣活動、細胞の組織化、武装準備と軍事訓練を行っている。

「ムスリム集団」は、イステイドゥアーフの自覚のもとに、権力との衝突を避け、社会との接触を宣教に必要な最小限に抑え、天佑を待って受動的に「近代的」生活を否定した半自給自足の共同生活を送っている。

### ④権力志向

「ジハード団」と「イスラーム集団」にとっては、重要なのはシャリーア（法）の実践であつて、その主体が誰かではない。つまり両組織はシャリーアの問題をイマーム論より優先するサラフィー主義の政治思想を忠実に継承している。

ただし「ジハード団」は現実的にはイスラーム世界の為政者たちの改悛の可能性を信じず、民衆の主体的変革にも期待をつながないため、結果としてはクーデターによる自らの手での政権奪取を目指している。

「イスラーム集団」は全面的なジハードによる政権打倒に至らなくとも、「善の命令と悪の阻止」の圧力によって既存体制にシャリーアの実践を余儀なくさせることも可能だと考えており、権力志向は弱い\*14。

権力への志向が最も強いのは「ムスリム集団」である。「ムスリム集団」はシャリーアではなくイマームの問題を信仰の要とみなす。「ムスリム集団」にあつてはそもそも Dr. ワヒードへの服従こそが、ムスリムであることのメルクマールであり、それゆえ Dr. ワヒードへの服従が全人類に要求されることになる。

\*13 「イスラーム集団」、「ジハード団」については中田 [1992a; 1992b]、白岩 [1993] 参照。

## ⑤国際化

三つの団体に共通する特徴としては、政府のタクフィールを別にしてもエジプトを越えたネットワークの国際化があげられる。国際化には三つのレベルが区別できる。

(a)アラブ世界：サウディアラビア（＋湾岸諸国）、スーダン、イエメン等

(b)イスラーム世界：アフガニスタン、パキスタン、ボスニア等

(c)非イスラーム世界：欧米諸国

既述の通り、「ムスリム集団」もこの3つのレベルで組織を展開しており、この点においては、イエメンに特別な地位を与えている以外、「イスラーム集団」、「ジハード団」と目立った違いは存在しない。

## IV. 1996年の新展開

サービルの『テロリストの実習』が公刊されてからも、1994年、95年には、「ムスリム集団」をめぐるの目立った動きは見られなかった。しかし1996年になると、「タクフィール・ワ・ヒジュラ」に関して注目すべき報道が2件現れる。

## 1. 一斉検挙

1996年4月10日、突然エジプト内務省は「タクフィール・ワ・ヒジュラ」再結成の陰謀を阻止した、と発表する。報道によると、治安当局は17の州にまたがる「タクフィール・ワ・ヒジュラ」のアジトを急襲し、メンバー245名を逮捕し、内部文書と共に武器弾薬を押収した [1996 (April 11) *AL=Hayā*]。また「タクフィール・ワ・ヒジュラ」はアラブ諸国に細胞組織を有し、国内のメンバーは国外からの送金による資金援助を受けており、「権力との対決、政権奪取が可能になるようにと、組織の基盤の拡大に努めていた」 [1996 (May 2) *AL=Hayā*]。

治安当局は逮捕した幹部7名の名前を発表した\*15。このうちでリスト筆頭の「アブド・アル=ファッターフ・カーシム・ナーシル」は、Dr. ワヒードの「ムスリム集団」の現諮問委員=事務局長=法学・私設学校教育担当の「アブド・アル=ファッターフ・カーシム」と同定できるため、この組織はDr. ワヒードの「ムスリム集団」である\*16。

\*14 「イスラーム集団」のあるメンバーは新聞記者のインタビューに以下のように答えている。

「我々にとって最も重要なことはイスラームがエジプトを統治することである。我々は我々が統治することを条件とはしない。我々は軍人であれ文民であれ、現政権であれ、他の誰であれ、イスラームによって統治する者なら誰でも歓迎する。重要なのは彼がイスラームに則って統治することである」 [Ahmad 1994: 40-41]。

またリファアト国会議長暗殺容疑犯（後に無罪釈放）サファワト・アブド・アル=ガニーは公判の場で「イスラーム集団が支配者となることを望み、権力を追求している」との権力の側からの非難に対し、実際に権力の座にしがみついている者たちが彼らを非難するのは、酒に身体ごと浸かっている者が、酒を飲んでもいない素面の者を酔っ払いと呼ぶようなものだ、と嘲笑している [Abd al-Sālam 1994: 313]。

\*15 7名の名前は以下の通り。1. アブド・アル=ファッターフ・カーシム・ナーシル、2. マフムード・ファフミー・アブド・アル=サラーム・ガーニム、3. サイド・ザキー・イブラーヒーム・シャラビー、4. ワジフ・アル=ディーン・アフマド・スライマーン、5. アティヤ・アブド=アッラーフ・アフマド・ジャード、6. マフムード・ファフミー・シャキーク、7. ムフスィン・ハーミド・アル=ザッハールである [AL=Hayā, 1996/4/11]。

なお著者のインタビューに答えてサービル氏は、これらの幹部のうち、マフムード・ファフミー・シャキークとムフスィン・ハーミド・アル=ザッハールは「ムスリム集団」を脱退しすでに釈放されたと述べている。

現在エジプト内務省は、体制内改革派の「ムスリム同胞団」のメンバーの逮捕にすら「体制転覆 (qalb al-nizam)」容疑を乱発している。従って内務省が「組織再結成 (ihya au i ada tashkil tanzim) の阻止」を口実にしか「ムスリム集団」の一斉検挙を行えなかったということは、反体制武装闘争を示唆する証拠が皆無であることを意味している。従ってこの一斉検挙は、「ムスリム集団」の武力闘争への路線変更を示すものではない。むしろそれはイデオロギー闘争によっては「ムスリム集団」のような非暴力主義を採る反体制派組織の伸張すら阻止できず、強権に訴える以外の手段のないエジプト政府の思想弾圧の強化を示す事件と解釈できよう。

## 2. 「カリフ会議」参加

1996年夏、「解放党」(通称「イスラーム解放党」)の分派「亡命者 (Muhajirun)」が、イスラーム主義諸組織の大同団結を図り、エジプトの「ジハード団」, 「イスラーム集団」, 及びアルジェリアの FIS (イスラーム救国戦線), パレスチナの「イブズ・アル=ディーン・アルカッサーム部隊」, 「アフガーン・アラブ」の指導者ウサ

ーマ・ブン・ラーディン, レバノンの「ヒズブ・アッラーフ」などを「カリフ会議」の名の下に糾合した\*17。

ロンドンで開催される予定であった「カリフ会議」はエジプト政府等の干渉により流会したが、「亡命者」の代表ウマル・バクリーは、エジプトの週刊誌『ローゼルユーセルフ』のインタビューに応じて、参加組織の名を明かし、次のように述べている。

「我々に合流した (inḍamma) 最後の団体はエジプトの『勝利の前線 (Ṭalā'i al-Fath) 団』(ジハード団の分派) であり、それ以前に『イスラーム集団』が我々に合流し、次いで、あなた方が『タクフィール・ワ・ヒジュラ』と呼んでいる『宣教 (al-Da'wa) とヒジュラ団』が続く。エジプトの『ジハード団』について言えば、それはこの『(カリフ) 会議』の極めて重要な参加組織の一つである」[Wa'il 1996: 23]。

バクリーが、このインタビューで「タクフィール・ワ・ヒジュラ」=「宣教とヒジュラ団」について触れた箇所はこの一ヶ所のみであり、この「宣教とヒジュラ団」の実態は不明である。しかし「宣教とヒジュラ団」との命名は、「伝達 (balāgh) を完遂し……(中略)……完全な移住 (hijra)」

\*16 \* 4, \* 7, \*11参照。

なお、アーディル・ドゥスーキーは、1996年の大量検挙を踏まえて、シュクリー・ムスタファー処刑後の「タクフィール・ワ・ヒジュラ」の歴史を、77年から83年まで、83年から89年まで、89年から96年までの3段階に分ける。アーディルによると、第1期と第2期の特徴は、1. 砂漠への完全移住の戦略的放棄、2. 顎鬚などの宗教的外観の放棄、3. 政府機関への就職の解禁、公然活動、「ムスリム集団」の公式名称の公表となる。またアーディルは、第3期の新傾向として、1. 「タクフィール・ワ・ヒジュラ」のイデオロギー教育による団員育成、2. 準公然活動と団員獲得のために社会復帰、3. 砂漠への集団移住の急ぎと権力との非闘争、4. 軍事部門建設のための武術訓練、資金獲得のための銀行・商店襲撃許可、団員家族の勧誘等を挙げている [‘Adil 1996]。

\*17 「カリフ会議」は、アラブ諸国の妨害により開催中止になったが、FISからはアリー・ビルハーッジュ、ヒズブ・アッラーからはムハマンド・フサイン・ファドゥル・アッラーが「カリフ会議」にビデオを送った、と言われていた。「カリフ会議」への「ムスリム集団」の参加計画の真偽についての著者の質問に対して、サービル氏は「ムスリム集団」ロンドン支部は、ジハード系諸グループの影響下にある、との見方を示している [‘Abd Allāh 1996: 20-21; Wa' il 1996: 22-25]。



[Sabir 1994: 210] との Dr. ワヒードの活動方針とも一致し、「ムスリム集団」の別名として不適切とは言えず、この「タクフィール・ワ・ヒジュラ」=「宣教とヒジュラ団」は Dr. ワヒードの「ムスリム集団」であると考えるのが最も自然であろう。

この「カリフ会議」は、「(我々) イスラーム主義諸集団は全て、不信仰の体制の実力による打倒の必要については、完全な一致を見ている」[Wa'il 1996: 23] とのバクリーの言葉通り、既成秩序の打倒のみを共通目標に、シーア派の「ヒズブ・アッラーフ」との提携も敢えて辞さない運動であるため、教義的にスンナ派の枠から外れた「ムスリム集団」の参加も可能である。

しかし「ムスリム集団」は、第3章で明らかにした通り、教義的に甚だ排他的である上に極めて権力志向の強い「独善的」団体であるため、「亡命者」に合流した(inādamma)とは考えにくい。バクリーの言う「宣教とヒジュラ団」と Dr. ワヒードの「ムスリム集団」が同一組織であるとすれば、その「カリフ会議」への参加は、単なる会議への出席<sup>\*18</sup>以上のものではないように思われる。

## V. 結びに代えて

「ムスリム集団」の主張はスンナ派正統教義を逸脱しており、イスラーム学の学術的議論の中で正当化できるものではなく、イスラーム学の学問と言論の自由が保障されれば自然に淘汰される類のものである。

「ムスリム集団」の伸長の理由の一つには、エジプト政府のイスラーム学の学問と言論の自由の抑圧がある。

「ムスリム集団」はかつてシュクリーによる「公然宣教段階」の宣言から元宗教相の誘拐・殺害へと暴走したため、権力の介入によって壊滅的打撃を被った。再結成後の「ムスリム集団」はイステイドゥーフの現状認識に基づき、他のイスラーム主義武装闘争派とは全く異なる終末論的・他力救済主義的な世界観に立って、非暴力主義の宣教に徹してきた。

社会・経済の閉塞状況が続く中で、「15世紀を遡って預言者の時代に帰れ」との「ムスリム集団」の主張は一定の説得力と魅力を有し、支持者を拡大していった。権力が弾圧に踏み切らない限り、「ムスリム集団」は今後も伸長を続けることが十分予想された。

イデオロギー闘争によるイスラーム主義封じ込めに失敗したエジプト政府は、1996年、イスラーム主義への弾圧強化政策の一環として、「ムスリム集団」の一斉検挙に踏み切った。社会との接触を最小限に抑え、非暴力主義の宣教に徹してきた「ムスリム集団」に対するこの処置は、メンバーの国外脱出(ヒジュラ)を加速させることになると思われる。

ロンドンで開催を予定された「カリフ会議」への「ムスリム集団」の参加も、国内での弾圧強化への対応策として国外脱出を図り、新たに宣教の場を海外に求める「ム

\*18 Dr. ワヒード自身、サービルの招きで『アフバル・アル=ヤウム』新聞社におけるシャウキー派からの体制側への転向者アーディル・ムハンマド・アブド・アル=バーキーとの討論に応じており、「カリフ会議」への出席自体は十分に考えられる [Sabir 1994: 214]。

スリム集団」の新路線という文脈で理解されるべきものかもしれない。

#### 参考文献

- ‘Abd Allāh Kamīl  
1996 (Sept.) Umaimiyya Islāmiyya Jadīda fī Ūrūbā? in *al-Wasat*, No. 243: 20-21
- ‘Abd al-Salām al-Wahāti  
1994 *Ṣafwat ‘Abd al-Ghanī* Cairo, Dār Sufinkus
- ‘Ādil Dusūqī  
1996 (Nov. 19) Rub‘ Qarn ‘alā Ḥuhūr Fikr al-Takfir wa al-Hijra: al-Jamā ‘a al-Ūlā  
Taghaiyarat Malāmiḥ-hā Ḥuhūr Arba ‘a Jamā ‘āt Ukhrā *AL-Hayā*
- Ahmad ‘Umar  
1994 *Asyūt Madīna al-Nār* Cairo: Dār Sufinkus  
クレイビル・ドナルド・B (杉原利治・大藪千穂訳)  
1996 『アーミッシュの謎——宗教・社会・生活』 論創社
- Kepel, Gilles Trans., by Jon Rothschild  
1995 *The Prophet and Pharaoh* London: Al Saqi Books
- 小杉 泰  
1994 『現代中東とイスラーム政治』 昭和堂
- 松葉祥一  
1995 「民主主義の両義性」『現代思想』23(12)52 - 60
- 中田 考  
1992a 「エジプトのジハード団」『中東研究』No. 362: 5-14  
1992b 「1992年: エジプト・反『イスラーム主義』政策の転機」『中東研究』370: 21 - 30  
1992c 「ジハード(聖戦)論再考」『オリエント』35(1): 16 - 31  
1995 「イスラーム復興運動の思想と背景」『海外事情』43(11): 18 - 34  
1996 「イスラーム主義とシャリーア」山内昌之編『「イスラーム原理主義」とは何か』岩波書店: 93 - 114
- Rajab Madkūr  
1985 *al-Takfir wa al-Hijra — wajhan li-wajh* Cairo: Maktaba al-Dīn al-Qaiyim
- Sābir Shauka  
1994 *Irhābī taḥta al-Tamrin* Cairo: Akhabar al-Yaum
- 白岩 良  
1993 「エジプト: 『イスラーム集団』の戦い」『中東研究』No. 384: 4-23
- Wā’il al-Ibrāshī  
1994 (Feb. 6) 1996 (Apr. 11) 1996 (May 2) *Al-Hayā*  
1996 (Sept.) Jabha Muwahhada Li-Isqat al-Hukkām al-‘Arab in *Rose El Yous sef* No. 3561: 22-25